

『平家物語』における「さて」の用法

濱千代 いづみ

キーワード：さて 平家物語 副詞 接続詞 単純継起

1 はじめに

『平家物語』には「さて」及びこれに助詞の付いた形の「さては」「さても」などが多数用いられている。それらは副詞・接続詞・感動詞にわたり幅広い用法を示している。本研究の目的は、「さて」とこれに助詞の付いた形の語群を調査分析し、『平家物語』における用法の特色を把握することである。

古典に見られる「さて」の用法に関する先行研究は、平安時代の和文におけるものが中心である。糸井（1987）によると、平安時代の和文における「さて」は、前文の内容を受けて後文につなげていく用法から、転換ともいえる話題の語り出しの用法まで見られる。しかし、西田（2001）は『源氏物語』における接続詞的用法の「さて」を検討し、『源氏物語』の地の文では転換の用法は使用されず、前文を受けて後文につなげる用法に限定されているとする。また、宮田（1993）は『蜻蛉日記』の「さて」が予期し得ぬ新たなできごとの出来へと展開する文脈で使われているとする。

池上（1947）は平安時代の接続詞成立に対し、否定的な見解を提出した。そのため、上記の三論では接続語・指示語・接続詞的表現という語が用いられている。が、京極（1973）では、接続詞の認定に迷うものの多いことが平安時代の特徴であるとしつつ、接続詞の存在を認めている。そして、平安時代の和語系接続詞の代表的なものの一つに「さて」をあげている。また、古代後期から中世にかけて、接続詞が質量ともにいちじるしく発達し、この時期が接続詞の変遷の一画期であったとしてよいと述べる。金田一（1959）は『平家物語』の接続詞に関して、「数がふえてきているが、今よりも一般に意味が漠然としており、厳密さを欠く」とし、「さて」は「そういうふうで」という意味を多分に残していると指摘している。

『平家物語』はまさに接続詞の変遷の一画期である中世に成立した。この作品における「さて」とこれに助詞の付いた形の語群を調査分析することは、一作品の用法の特色を把握するにとどまらず、接続詞の変遷を知るうえでも価値あることと考える。

なお、調査に使用する文献は次のものである。略称を併せて示す。

① 『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（自立語篇）

② 新日本古典文学大系『平家物語』…「新大系」〈高野本〉

「新大系」の底本は〈高野本〉である。^(注1)〈高野本〉は『平家物語』諸本のうち、語りの証本を志向した覚一本に属する。その中でも古態を継承した後期の伝本である。漢字仮名交じりの和漢混交文で書かれている。

2 「さて」の分類

「さて」は指示語「さ」に接続助詞「て」が結合した語である。その成立の仕方からして、本来、前文の叙述内容を具体的に受けて、そのまま後文の内容に結びつける働きをする。その指示する機能がどれほど形式的になったか、説き起こしや転換の機能が中心になったか、そこに接続の機能があるか、発話的かなどが副詞・接続詞・感動詞という文法上の相違になる。どこで線を引くかによって辞書間で記述が異なっている。

『時代別国語大辞典 室町時代編』（「時代別」と略称）

さて

一（副）① 前件を承けて、その状態のままで事態が推移するさま。

② 前件を承けて、そのとおりだと肯定するさま。

二（接）① 前件に引き続く後件を述べるのに用いる。

② 前件を承けて、その当然の帰結としての後件を導くのに用いる。

③ 前件に、さらに添えるべき条件をあげるのに用いる。

④ 前件を承けて、当面の話題を転ずるのに用いる。

⑤ それまでの事情や話題を承けて、相手に問いかけるのに用いる。

三（感）① 対象が驚嘆すべきものであることに改めて気付いて発する声。

② 改めて注意をうながしながら、相手にはたらきかける声。

③ いまさらのように自らに問いかける声。

四 形容動詞として用いられ、その事態を疑わしく確信しかねるものとして留保するさまである意を表す。

『日本国語大辞典 第二版』（「日国大」と略称）

さて

一〔副〕（副詞「さ（然）」に助詞「て」が付いてできたもの）

① すでに存する事柄を状態として具体的に指示する。そのような状態で。そのまま

で。それがすべて。

- ② すでに存する事柄を、状態として抽象的に指示する。しかじかの状態で。これこれで。
- ③ すでに存する事物・事態をうけて、それに時間的・論理的に後続する事物・事態の叙述の説明、修飾とする。そうなった後に。その次に。

二〔接続〕（扱・偕・扱）

- ① 文脈上すでに存する事物・事態をうけ、これと並行して存する他の事物・事態に話を転じる。一方では。他方。ところで。
- ② すでに存する事物・事態をうけ、時間的にこれに続く事態を導く。
 - ㉠ そうして。それから。その後。
 - ㉡ だから。そこで。
 - ㉢ だからといって。そうはいつでも。さりとて。

三〔感動〕

- ① それにしても。まあ。それはそうと一体。はてさて。さあ。
 - ㉠ 疑問文に用いる。
 - ㉡ 感動文に用いる。
- ② 文末に置かれる特殊用法。自分の発言内容をいかにもその通りだと確認する気持ちを表す。まあ。
- ③ 何か動作をしようとするときに発する語。さてと。さあ。

接続詞と感動詞との境界に位置するものを「時代別」では接続詞（⑤）に、「日国大」では感動詞（①④）に分類している。本研究では「さて」の指示語的要素が残っているかにも着目していくので、接続詞の範囲を広く捉える形で判定していく。そこで、品詞分類を行う場合、「さて」とこれに助詞の付いた形の語群全体に、共通に次のような基準を設定しておく。

一 副詞

前文の叙述内容を状態として受け、後文の内容を修飾限定する。そのまま。そのような状態で。

二 接続詞

- ① 前文の叙述内容を受け、時間的・空間的・心理的にこれに続いて生じる事態・事柄を述べる。そうして。それで。

- ② 前文の叙述内容をまとめて受け、以下、話題を転換して述べる。ところで。
- ③ 前の事態・事柄に、さらに添加すべき条件をあげる。その上。
- ④ それまでの事情や話題を受け、相手に問いかけ、話の先を促す。それはそうと。
はてさて。

三 感動詞

- ① 対象が驚嘆すべきものであることに改めて気付いて発する声。それにしてもまあ。
- ② 改めて注意をうながしながら、相手にはたらきかける声。さあ。はてさて。

3 「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群の概要

『平家物語』の「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群を、どのような文体で用いられているか、文中のどの位置に現れるかによって整理して示すと表1のようである。

表1 「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群

文体		地の文		会話文		心内文		消息文		合 計	
文中の位置		文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中
見 出 し 語	さて	31	2	32	4	0	0	1	0	64	6
	計	33		36		0		1		70 48.3%	
	さては	0	1	19	2	3	0	0	0	22	3
	計	1		21		3		0		25 17.2%	
	さてこそ	12	1	0	2	0	0	0	0	12	3
	計	13		2		0		0		15 10.3%	
	さても#	12	7	14	1	0	0	0	0	26	8
	計	19		15		0		0		34 23.4%	
	さてさて	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
	計	0		1		0		0		1 0.7%	
合 計		55	11	66	9	3	0	1	0	125	20
		66 45.5%		75 51.7%		3 2.1%		1 0.7%		145 100%	

「さても」を含む。

見出し語から見ると、「さて」の度数が70（48.3%）と最も多く、「さても」34、「さては」25、「さてこそ」15と続く。今回の調査で「さてまた」「さてもさても」「さておく」は見つからなかった。なお、「さてさて」の1例は次のものである。引用は「新大

系」により、巻、ページ、行を示す。また、適宜振り仮名を付ける。

例1 小松殿父の禪門の御まへにおはして、「あの丹波少将が事を、宰相のあながちに歎申候が不便に候。中宮御悩の御こと、承及ごとくんば、殊更成親卿が死霊なンド聞え候。大納言が死霊をなだめんとおぼしめさんにつけても、生て候少将をこそ召しかへされ候はめ。人のおもひをやめさせ給はば、おぼしめす事もかなひ、人の願ひをかなへさせ給はば、御願もすなはち成就して、中宮やがて皇子御誕生あつて、家門の栄花^{いよいよ}弥さかんに候べし」なンド申されければ、入道相国、日ごろにも似ず事の外にやはらひで、「さてさて、俊寛と康頼法師が事はいかに」。(巻三、140-6)

「さてさて」は、小松殿(平重盛)の説得に対する入道相国(平清盛)の応答の文頭に現れる。小松殿は、鬼界が島に流罪となった丹波の少将(藤原成経)を都へ返すようにと説得する。入道相国は、丹波の少将とともに流された俊寛と康頼の事はどうかと尋ねる。「さてさて」は丹波の少将の赦免に関係する内容をまとめて受け、他の二名の処置へと展開させる機能を持っている。文の種類は疑問文である。接続詞④に分類できると考える。

「日国大」の見出し語「さてさて」では接続詞を設けていない。「副詞『さて②』を強めたい方」の例として、この部分を引用している。^(注2)

文体から見ると、地の文66(45.5%)と会話文75(51.7%)とで97%を越える。会話文での使用がわずかに多くなっている。地の文でよく使われる語は、「さて」33・「さてこそ」13・「さても」19で、主に文頭に位置している。が、「さても」には文中に位置するものもかなりある。会話文でよく使われる語は「さて」36・「さては」21・「さても」15で、主に文頭に位置している。「さてこそ」の度数は2と少ない。「さては」は口語的、「さてこそ」は文語的な語であるといえよう。

文中での位置から見ると、文頭が125(86.2%)、文中が20(13.8%)で、文頭が圧倒的に多くなっている。

以下の章では見出し語別に用法の検討を行うことにする。

4 「さて」の用法

「さて」を文中における機能と意味の観点で副詞・接続詞・感動詞に分類し、用いられている文体・文中での位置によって整理して示すと表2のようである。

表2 「さて」の分類

文体		地の文		会話文		消息文		合計	
文中の位置		文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中
品詞	副詞	0	1	3	4	1	0	4	5
	計	1		7		1		9 12.9%	
	接続詞	31	1	25	0	0	0	56	1
	計	32		25		0		57 81.4%	
	感動詞	0	0	4	0	0	0	4	0
	計	0		4		0		4 5.7%	
合計		31	2	32	4	1	0	64	6
		33 47.1%		36 51.4%		1 1.4%		70 100%	

文体から見ると、地の文33（47.1%）と会話文36（51.4%）とがほぼ同量である。消息文の1例は次のものである。

例2 其^こ比、内裏よりひそかに鳥羽殿へ御書あり。「かからむ世には、雲井に跡をとどめても何かはし候べき。寛平の昔をもとぶらひ花山の^{いにしへ}古をも尋て、家を出、世をのがれ、山林流浪の行者共なりぬべうこそ候へ」とあそばされたりければ、法皇の御返事には、「さなおぼしめされ候そ。さて渡らせ給ふこそ、ひとつのたのみにても候へ。…」
（巻三、193-9）

「さて」は高倉天皇からの御書に対する後白河法皇の御返事に現れる。天皇は退位、出家のお志を述べ、法皇は「そのように皇位に着いていらっしゃるのこそ、一つの頼みでもあります」と退位、出家を引き止めなさる。副詞の用法である。

文中での位置から見ると、文頭が64（91.4%）、文中が6（8.6%）で、「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群全体の場合よりも一層文頭が多くなっている。

品詞の別から見ると、接続詞の用法が57（81.4%）で最も多く、他の用法と比べて大差がある。以下、品詞別に用法を見ることにしよう。

4. 1 副詞の用法

副詞の用法は度数が9で、「さて」全体の12.9%に相当する。文体では会話文が7例と多い。地の文と消息文が各1例である。消息文の例は先にあげた。地の文の例は次のものである。

例3 其後伊豆国給はり、子息仲綱受領になし、我身^{わがみ}三位して、丹波の五ヶ庄、若狭の

とう宮河^{ちぎやう}知行して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛おこいて、宮をも失ひ
まいらせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ。(巻四、258-16)

源頼政はヌエ退治の功労と和歌の才能によって名を知られた。「さて」は知行地を持ち、三位に叙せられたことを受け、安泰に過ごしていられるはずであったという内容に結びつける。

文中での位置から見ると、文頭のものが4、文中のものが5でほぼ同数である。が、接続詞・感動詞の用法と比較すると文中のものが極めて多いことがわかる。これは前文の叙述内容を状態として受け、後文の内容に結びつけるという副詞の機能と関係する。文中の例を次にあげる。

例4 ^{おなじき}同 九月廿九日、土佐房都へついたりけれ共、次日まで判官殿へも参らず。

^{しやうしゆん}正 俊 かのぼりたるよし聞給ひ、武蔵房弁慶をもって召されければ、やがてつれて参りたり。判官の給ひけるは、「いかに鎌倉殿より御文はなきか」。「さしたる御事候はぬ間、御文はまいらせられず候。御詞にて申せと候しは、『当時まで都に別の子細なく候事、さて御渡候ゆへとおぼえ候。相構てよく守護せさせ給へと申せ』とこそ、仰せられ候つれ」。(巻十二、348-12)

土佐房正俊は義経をねらう刺客である。「さて」は正俊が伝える頼朝から義経への言葉の中に現れる。都の治安が維持されていることを受け、それが義経の働きによるという内容に結びつける。「さて」は、そのように治安維持に努めている状態を意味する。

副詞の「さて」は「渡らせ給ふ」「おはす」など存在動詞と共起する場合が多い。

4. 2 接続詞の用法

接続詞の用法は度数が57で、「さて」全体の81.4%に相当する。文体では地の文の方が会話文よりも多い。文中の位置では文頭のものが56で、文中のもの1に比べて圧倒的に多い。

これらを第2章で示した分類の〔接続詞、①～④〕に整理すると表3のようである。これによると、文体の相違と用法の相違とに関連があることが読み取れる。地の文の場合は用法①が30で、地の文全体32の93.8%に相当する。会話文の場合は用法④が21で、会話文全体25の84.0%相当する。

表3 接続詞の「さて」の用法

文体		地の文			会話文			合計
文中の位置		文頭	文中	計	文頭	文中	計	
用法	①	29	1	30	3	0	3	33
	②	2	0	2	1	0	1	3
	③	0	0	0	0	0	0	0
	④	0	0	0	21	0	21	21
合計		31	1	32	25	0	25	57

用法①の例として地の文における文頭の例をあげよう。

例5 やや深更に及で、程とをく人のさけぶ声しけり。供奉の人々は聞きつけられざりけれども、主上きこしめして、「今さけぶものは何ものぞ。きッと見てまいれ」と仰ければ、うへぶししたる殿上人、上^{じやうにち}日のものに仰す。はしりちって尋ぬれば、ある辻にあやしのめのわらはの、ながもちのふたさげてなくにてぞ有ける。「いかに」ととへば、「主の女房の院の御所にさぶらはせ給ふが、此程やうやうにしてしたてられたる御装束もって参るほどに、只今男の二三人まうできて、うばひとってまかりぬるぞや。今は御装束があらばこそ、御所にもさぶらはせ給はめ。又はかばかりうたちやどらせ給ふべきしたしい御方もまします。此事思ひつづくるになく也」とぞ申ける。さてかのめのわらはをぐして参り、此よし奏聞しければ、

(巻六、328-6)

「さて」は高倉天皇のお聞きになった叫び声が、強奪の被害にあった女の童のあげたものであったという内容をまとめてうける。そして、それに時間的に続く内容に結びつける。

用法④の例として会話文における文頭の例をあげよう。

例6 主上きこしめして、「あなむざん、いかなるもののしわざにてかあるらん。…かだましきもの朝^{てう}にあって罪をおかす。是わが恥にあらずや」とぞ仰ける。「さてとられつらんきぬは、何いろぞ」と御たづねあれば、しかしかのいろと奏す。

(巻六、328-10)

例5の直後に続く文章である。天皇は強奪事件に関する報告をうけ、心のすさんだ者が悪事を働くのはわが恥であるとしながら、盗られた装束の色を質問される。「さて」は一連の事柄をうけて疑問文に用いられている。

ここで、会話文における話し手と聞き手との関係について触れておく。現代よりも身

分による上下関係が明確な当時、問いかけは上位者から下位者へ、あるいは同等の者へ
の場合が多いと予測される。調査の結果はその予測を裏付けるものであった。しかし、
用法④の中で、下位者から上位者への問いかけになっている場合が一部あった。その話
し手と聞き手は次のようである。

- a 平家貞（郎等）・平忠盛（巻一、8－6）
- b 藤原成経（少将）・平教盛（宰相）（巻二、92－5）
- c 放免（検非違使の下役人）・文覚（巻五、297－1）
- d 若君姫君・母北の方（巻十、199－3）

a はもと一門の者で今は忠実な郎等から主人へ、b は婿から舅へ、d は子どもたちか
ら母へというように近い関係にある者への問いかけに用いられている。c の放免は刑
期の終わった囚人の中から選ばれた者である。が、この時点では権力を背景にした護送
役人であり、流罪人の文覚より立場が上になる。

なお、問いかけではない用法①の会話文3例の話し手と聞き手は次のようである。

- e 藤原重兼（蔵人）・藤原実定（大納言）（巻二、116－13）
- f 丹後殿（女房）・後白河法皇（巻八、70－7）
- g 建礼門院（高倉天皇の中宮）・後白河法皇（高倉天皇の父）（灌頂、405－13）

話し手が上位者で聞き手が下位者という関係の例はない。

現代語によく見られる話題転換の用法②は全部で3と少ない。そして、添加の用法③
は全く存しない。用法②の例として会話文における文頭の例をあげる。

例7 伊勢三郎義盛、あゆませ出でて申けるは、「こともおろかや、清和天皇十代の御
末、鎌倉殿の御弟、九郎大夫判官殿ぞかし」。盛次^{もりつぎ}「さる事あり。一とせ平治の合
戦にちち討たれて、みなし子にてありしが、鞍馬^{ちご}の児して、後にはこがね商人^{あきんど}の所
従になり、^{らうれう}糧料せをうて奥州へ落ちまどひし小冠者が事か」とぞ申たる。義盛、
「舌のやはらかなるままに、君の御事な申そ。さてわ人どもは、^{となみ}砥浪山のいくさに
おい落され、からき命いきて、^{ほくろくどう}北陸道にさまよひ、^{こつじき}乞食して、なくな京へのぼり
たりし物か」とぞ申ける。
(巻十一、270－13)

源義経の部下の伊勢三郎義盛と、平家方の越中次郎兵衛盛次との言葉戦いの場面であ
る。「さて」は義盛の会話に出現する。前文は主君義経のことを扱い、後文は盛次を含
めて平家の人々のことを述べる。疑問文になっているので、形式から用法④への分類も
考えられるが、話題転換の用法に分類した。日本古典文学全集『平家物語』（「全集」と
略称）の口語訳では例7の「さて」が「ところで」とある。

次に地の文の文頭の例をあげる。

例8 「これを射もころし、きりもころしたらんは、いかに念なからん。忠盛がふるまひやうこそ思慮ふかけれ。弓矢とる身はやさしかり」とて、その勳賞^{けんじやう}にさしも御最愛と聞えし祇園女御を、忠盛にこそたうだりけれ。

さてかの女房、院の御子をはらみたてまつりしかば、「うめらん子、女子ならば^{ちん}朕が子にせん、男子ならば忠盛が子にして、弓矢とる身にしたてよ」と仰けるに、すなはち男をうめり。(巻六、355-16)

白河院の御幸の折、忠盛の機転により、妖怪と見えたものが老法師であると判明した。忠盛はほうびに祇園女御をいただく。「さて」はこのひと続きの事件を受け、女房が院の御子である男子を出産する話題へと転換する。

例9 抑内侍所^{そもそもないしどころ}と申は、昔天照大神、天の岩戸に閉こもらむとせさせ給ひし時、いかにもして我御かたちをうつしおきて、御子孫に見せたてまつらんとて、御鏡を^い鑄給へり。これなを御心にあはずとて、又鑄かへさせ給ひけり。さきの御鏡は紀伊国日^{にち}前・国懸^{ぜん・こくけん}の社是也。後の御鏡は御子あまのにいほみの尊にさづけまいらせ^(注3)させ給ひて、「^{てん}殿をおなじうしてすみ給へ」とぞ仰ける。(1)さて天照大神、天の岩戸にとちこもらせ給ひて、天下くらやみとなったりしに、…こやねたちからをといふ大ぢからの神、よってゑいと言ひてあけ給ひしよりして、たてられずといへり。(2)さて内侍所は、第九代の御門、開化天皇の御時までは、ひとつ殿におはしましけるを、第十代の御門、崇神天皇の御宇に及んで、靈威におそれて、別の殿へ移したてまつらせ給ふ。(巻十一、313-11)

例9で、(1)「さて」の前は三種の神器のひとつ、鏡の由来を述べている。(1)「さて」の後、天照大神の天の岩戸隠れの内容に発展する。それが(2)「さて」の後、再び鏡の由来に話題が戻っている。この部分は諸本で本文に異同があり、(1)「さて」以下(2)「さて」前の、天の岩戸隠れを欠く伝本も存^(注4)する。ここでは、(1)「さて」は用法①、(2)「さて」を用法②に分類した。「全集」の口語訳では(2)「さて」を「ところで」としている。

西田(2001)によると、『源氏物語』の会話文で転換の用法が見られるが、地の文ではそれが見られない。しかし、『平家物語』の場合、少数ながら地の文にも転換の用法が見られ、現代語に近づいている。

4. 3 感動詞の用法

感動詞の用法は4例で、「さて」全体の5.7%に相当する。すべて会話文の文頭に位置するものである。

例10 (俊寛は) 舟に取つき、「さていかにをのを、俊寛をば遂に捨はて給ふか。…」
(巻三、143-15)

例11 (斎藤五・六は) 急ぎ大覚寺へぞ参りける。北方、「さていかにや、いかに」と
(首渡しの様子を) 問給へば、
(巻十、197-3)

例12 七月の末に、かの(屋島へ派遣した) 使帰りきたれり。北方、「さていかにや、
いかに」と(夫の安否を) 問たまへば、
(巻十、247-16)

例13 斎藤六帰り参りたり。「さていかにやいかに」と(若君六代の様子を) 問ひ給へ
ば、
(巻十二、360-15)

例10は、鬼界が島を去る成経・康頼に対して、俊寛が呼び掛けた語である。例11・12・13は平維盛の北の方の問いかけである。4例とも第2章で示した〔感動詞、②の用法(注意をうながしながら、相手にはたらきかける声)〕に分類できる。

4. 4 「さて」のまとめ

「さて」の用法をまとめると次のような特色が明らかになる。

- a 文体から見ると、地の文と会話文とがほぼ同量で、消息文が1例ある。
- b 文中での位置から見ると、文頭が九割を超える。「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群全体の場合よりも一層文頭が多くなっている。
- c 副詞の用法は「さて」全体の12.9%に相当する。文体では会話文が多く、地の文と消息文が各1例である。文中での位置から見ると、文頭のもの・文中のものがほぼ同数である。が、他の品詞と比較すると文中のものが多。これは前文の叙述内容を状態として受け、後文の内容に結びつけるという副詞の機能と関係する。副詞の「さて」は「渡らせ給ふ」「おはす」など存在動詞と共起する場合が多い。
- d 接続詞の用法は文体の相違と関連があることが読み取れる。地の文の場合は、前文の叙述内容を受け、それに続いて生じる事態・事柄を述べる用法が中心になる。会話文の場合は、それまでの事情や話題を受け、相手に問いかけ、話の先を促す用法が中心になる。話題転換の用法は少なく、添加の用法は全く存しない。
- e 感動詞の用法は「さて」全体の5.7%に相当する。すべて会話文の文頭に位置するものである。注意をうながしながら、相手にはたらきかける声に分類できる。

5 「さては」の用法

「さては」は「さて」に係助詞「は」が付いて成立した語で、「さて」を強めた表現である。『平家物語』には25例見られる。「さては」を文中における機能と意味の観点で

副詞・接続詞・感動詞に分類し、用いられている文体・文中での位置によって整理して示すと表4のようである。

表4 「さては」の分類

文体		地の文		会話文		心内文		合計	
文中の位置		文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中
品詞	副詞	0	0	0	1	0	0	0	1
	計	0		1		0		1	4.0%
	接続詞	0	1	19	1	2	0	21	2
	計	1		20		2		23	92.0%
	感動詞	0	0	0	0	1	0	1	0
	計	0		0		1		1	4.0%
合計		0	1	19	2	3	0	22	3
		1 4.0%		21 84.0%		3 12.0%		25	100%

文体から見ると、会話文での使用が21（84.0％）で圧倒的に多い。また、心内文での使用がわずかに見られる。「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群全体の場合よりも会話文での割合が多くなっている。文中での位置から見ると、文頭にあるものが22（88.0％）で圧倒的に多い。

品詞の別から見ると、接続詞の用法が23（92.0％）で最も多く、他の用法と比べて大差がある。品詞と文体との関係、品詞と文中の位置との関係については、接続詞以外の用法が少数のため明確なことはいえない。以下、品詞別に用法を見ることにしよう。

5. 1 副詞の用法

副詞の用法は1例のみである。

例14 （義仲は）猶も猫間殿とはえ言はで、「猫殿のまれまれわるたるに、物よそへ」とぞの給ひける。中納言、是を聞いて、「ただ今あるべうもなし」との給へば、「いかが、けどきにわるたるに、さてはあるべき」。（巻八、89-14）

「さては」は義仲から猫間中納言への言葉の中に現れる。「わいたる」は「おはしたる」の簡略な語形で、義仲の無粋さを際立たせる。当時、武士は一日に三食、貴族は二食であった。「さては」は食事時に来訪したことを受け、昼食を準備する内容につなげる。存在動詞「ある」と共起している。

5. 2 接続詞の用法

接続詞の用法23例を第2章で示した分類〔接続詞、①～④〕に整理すると表5のようである。

表5 接続詞の「さては」の用法

文体		地の文			会話文			心内文			合計
文中の位置		文頭	文中	計	文頭	文中	計	文頭	文中	計	
用法	①	0	0	0	16	0	16	2	0	2	18
	②	0	0	0	2	0	2	0	0	0	2
	③	0	1	1	0	1	1	0	0	0	2
	④	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1
合 計		0	1	1	19	1	20	2	0	2	23

用法①の例

例15 木曾大に悦ンで、「此勢あらば、などか最後のいくさせざるべき。ここにしぐらうで見ゆるは、たが手やらん」。「甲斐の一条次郎殿とこそ承候へ」。「勢はいくらほどあるやらん」。「六千余騎とこそ聞え候へ」。「さてはよい敵^{かたき}ごさんなれ。…」とて、
(巻九、131-1)

「さては」は木曾義仲の言葉に現れる。今井四郎の返答を受けて最期の戦いにふさわしい敵だという判断を導く。「ごさんなれ」は「にこそあるなれ」の変化した形で、「なれ」は推定の助動詞である。〈高野本〉で13例見られる。そのうち「さては」と共起するのは7例である。「さては」と「ごさんなれ」との結び付きは強いといえる。この他の推量の表現に、次のようなものがある。

「べし」1例 「さてはしかるべし」(巻四、211-12)

「らん」2例 「さては案内は知ったるらん」(巻九、152-13)

「まじ」2例 「さてはなんぢにあふては、なのるまじひぞ」(巻九、175-10)

「やらん」2例 「さてはけふを最後にてあるやらん」(巻十一、328-14)

「やらん」は「にやあらん」の変化した形で、「ん」は推量の助動詞である。〈高野本〉における用法は、濱千代(1997)に詳しく記述されている。

「さては」は「それでは」「そういうことなら」に言い換えることができ、推量の表現と共起する。相手の発言やその時の状況を受けて、その内容から導き出される推測・

判断に続ける働きをする。

用法②の例

例16 其後入道、祇王が心のうちをば知り給はず、「いかに其後何事かある。さては仏御前があまりにつれづれげに見ゆるに、今様、ひとつうたへかし」との給へば、
(巻一、24-1)

白拍子の祇王は清盛の催促に従って来訪した。「さては」はその祇王に対する清盛の言葉に現れる。祇王の安否を問うあいさつの後、仏御前を楽しませるために今様を歌えと命じる本題に入る部分に用いられている。局面を変えて説き起こす語と考える。^(注5)

例17 (老僧が清盛に) 良久^やしう御物語せさせ給ふ。「昔よりいまにいたるまで、此山は密宗をひかへて退転なし。天下に又も候はず。大塔すでに修理おはり候たり。さては安芸の厳島、越前の気比の宮は、両界の垂跡で候が、気比の宮はさかへたれ共、厳島はなきが如^{ついで}に荒はてて候。此次に奏聞して、修理せさせ給へ。…」とて、立れけり。
(巻三、152-1)

「さては」は大塔の修理が完了してりっぱになったことを受け、厳島神社の荒廃した状態へと話題を転換する。「全集」の口語訳に「ところで」とある。

用法③の例

例18 公卿・殿上人、一人も供奉せられず、ただ北面の下臈^{げらふ}、さては金行といふ御力者ばかりぞ参りける。
(巻三、190-10)

後白河法皇が平家により鳥羽殿へ移される場面で用いられている。「さては」は「その上」という意味で、北面の下級武士に、金行という力仕事をする従者を添加する。

例19 競^{きほふ}かしこまって申けるは、「三位入道殿、三井寺にと聞え候。さだめて打手向けられ候はんずらん。心にくうも候はず。三井寺法師、さては渡辺のしたいやつ原こそ候らめ。…」
(巻四、225-4)

渡辺競から平宗盛への言葉に現れる。競は三位入道(源頼政)の家来であると同時に宗盛のもとにも出入りしていた。頼政の挙兵に従い、宗盛に背くことになる。「さては」は三井寺法師に、渡辺党の親しい連中を添加する。この添加の用法は「さて」で皆無であった。

用法④の例

例20 「わ僧は山法師か」。「山法師で候」。「誰と言ふぞ」。「西塔の北谷法師、常陸房^{ひたち}

しやうめい
正明と申者で候」。「さては行家につかはれんと言ひし僧か」。(巻十二、374-8)

「さては」は源行家の言葉に現れる。山法師が常陸房正明と名乗ったことを受け、それから導かれる判断を述べる。その点では①と同様である。が、この例はさらに相手への問いかけになっている。

5. 3 感動詞の用法

感動詞の用法は1例のみで、感動の意味を表す言葉と共起する。

例21 又其そばに、三ばかりなるおさなき人のおはしけるを、少将、「あれはいかに」
との給へば、六条、「是こそ」とばかり申て、袖をかほにをしあてて、涙を流しけ
るにこそ、さては下りし時、心くるしげなる有さまを見をきしが、事ゆへなく生立^{そたち}
けるよと、思ひ出ても悲しかりけり。(巻三、159-16)

少将藤原成経は鬼界が島から妻子のもとへ帰った。乳母の六条の言動から、遠流の間に生まれた我が子が無事に育ったことに気付く。「さては」は成経の心中の言葉に用いられ、「生立けるよ」と感動の表現で結ばれている。

5. 4 「さては」のまとめ

文体から見ると、会話文での使用が圧倒的に多く、心内文での使用がわずかに存する。「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群全体の場合よりも会話文での割合が多くなっている。文中での位置から見ると、文頭にあるものが圧倒的に多い。

品詞の別から見ると、接続詞の用法が最も多く、他の用法と比べて大差がある。副詞の用法は存在動詞と共起する。接続詞の用法では、相手の発言やその時の状況を受け、その内容から導き出される推測・判断に続ける働きをするものが多い。「それでは」「そういうことなら」に言い換えることができ、推量の表現と共起する。また、「さて」で皆無であった添加の用法が見られる。が、「さて」で多数存した相手に問いかけ、話の先を促す用法はわずか1例のみである。話題転換の用法も少ない。感動詞の用法は改めて気付いて発する声に分類でき、感動の表現と共起している。

6 「さてこそ」の用法

「さてこそ」は「さて」に係助詞「こそ」が付いて成立した語で、「さて」を強めた表現である。『平家物語』には15例見られる。「さてこそ」を文中における機能と意味の観点で副詞・接続詞・感動詞に分類し、用いられている文体・文中での位置によって整理して示すと表6のようである。

表6 「さてこそ」の分類

文体		地の文		会話文		合 計	
文中の位置		文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中
品 詞	副詞	0	1	0	1	0	2
	計	1		1		2 13.3%	
	接続詞	12	0	0	1	12	1
	計	12		1		13 86.7%	
	感動詞	0	0	0	0	0	0
	計	0		0		0 0.0%	
合 計		12	1	0	2	12	3
		13 86.7%		2 13.3%		15 100%	

文体から見ると、地の文での使用が13（86.7％）で、会話文に比べて圧倒的に多い。文中での位置から見ると、文頭が12（80.0％）で文中に比べて圧倒的に多い。品詞の別から見ると、接続詞の用法が13（86.7％）で最も多く、感動詞の用法は存しない。品詞と文体との関係、品詞と文中の位置との関係については、接続詞以外の用法が少数かゼロのため明確なことはいえない。以下、品詞別に用法を見ることにしよう。

6. 1 副詞の用法

副詞の用法は2例である。

例22 さる程に、鎌倉殿、大臣殿に対面あり。…比^{よしかず}氣藤四郎義員を使者で申されけるは、

「…流罪になだめられし事、ひとへに入道殿の御恩也。されば廿余年まで、さてこそ
まかりそ罷過候しかども、…」
(巻十一、327-1)

頼朝から平宗盛への言葉に現れる。清盛のおかげで流罪に軽減されたことを受け、「何事もなく」の意味を表し、年月の過ぎたことへつなげる。

例23 され共四十余人の女房達の御事、沙汰にも及ばざりしかば、親類にしたがひ、所縁についてぞおはしける。…しのぶ思ひは尽きせねども、歎ながらさてこそ過ごされけれ。
(灌頂、408-6)

平家の女人たちが離別・死別した親族・知人を慕い嘆くことを受け、「そのように」の意味を表し、年月を送ったことへつなげる。2例とも前の叙述を状態として受け、後へ続ける働きをしている。

6. 2 接続詞の用法

接続詞の用法13例を第2章で示した分類〔接続詞、①～④〕に整理すると、全部が①に分類できる。前件が後件の原因・理由・条件となる場合が多く、後件はそれまでの展開をひとまとめに受ける。

例24 この蟬折と申は、昔鳥羽院の御時、こがねを千両、宋朝の御門へをくらせ給ひたりければ、返報とおぼしくて、いきたる蟬のごとくに、ふしのついたる笛竹を、ひとよをくらせたまふ。…或時高松の中納言実平卿参って、この御笛をふかれけるが、世の常の笛のやうに思ひ忘れて、ひざよりしもにおかれたりければ、笛やとがめけん、其時蟬おれにけり。さてこそ蟬折とはつけられたれ。（巻四、238－6）

「さてこそ」は笛竹の伝来と、笛の蟬（吹口と頭との中間の背面部分）が折れた事情との記述を受けて、笛の命名へつな^(注6)げる。

例25 宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇をばつかひやみしぞや」ととはれければ、「いさかしかましな^ンど聞え候しかば、さてこそつかひやみ候しか」とぞの給ひける。（巻五、302－15）

「さてこそ」は平忠度から宮腹の女房への言葉に現れる。条件句を受け、当然の帰結として「扇を使うのをやめた」という下の句へつなげる。同様の例が「さて」にも存する。

例26 女院も通盛の卿の申とはかねてよりしろしめされたりければ、さて此文をあけて御覧ずるに、妓炉のけぶりのにほひことになつかしく、筆の立てども世の常ならず。（巻九、190－1）

小宰相は平通盛からの手紙をはかまの腰にはさんでいた。それを女院の御前で落としてしまう。「さて」は「通盛が小宰相へ言い寄っていたことを、女院も以前からご存じであったので」という条件句を受け、「手紙をあけて御覧になる」という下の句へつなげる。

6. 3 「さてこそ」のまとめ

文体から見ると、地の文での使用が会話文に比べて圧倒的に多い。文中での位置から見ると、文頭が圧倒的に多い。品詞の別から見ると、接続詞の用法が最も多く、感動詞の用法は存しない。

副詞の用法は前の叙述を状態として受け、後へ続ける働きをしている。

接続詞の用法は、前件が後件の原因・理由・条件となる場合が多く、後件はそれまでの展開をひとまとめに受ける。

7 「さて」の用法

「さて」は「さて」に係助詞「も」が付いて成立した語で、「さて」を強めた表現である。『平家物語』には34例見られる。「さて」を文中における機能と意味の観点で副詞・接続詞・感動詞に分類し、用いられている文体・文中での位置によって整理して示すと表7のようである。

表7 「さて」の分類

文体		地の文		会話文		合計	
文中の位置		文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中
品詞	副詞	11	7	0	1	11	8
	計	18		1		19	55.9%
	接続詞	0	0	8	0	8	0
	計	0		8		8	23.5%
	感動詞	1	0	6	0	7	0
	計	1		6		7	20.6%
合 計		12	7	14	1	26	8
		19 55.9%		15 44.1%		34	100%

文体から見ると、地の文19（55.9%）、会話文15（44.1%）で大差はないが、地の文の方が多い。文中での位置から見ると、文頭が26（76.5%）、文中が8（23.5%）で、文頭の方が多い。が、「さて」及びこれに助詞の付いた形の語群全体の場合よりも文中の割合が多くなっている。

品詞の別から見ると、副詞の用法が19（55.9%）で最も多い。「さて」では接続詞の用法が中心であったので、異なる点である。文体との関係では、副詞は地の文、接続詞・感動詞は会話文で主に用いられ、品詞による相違が見られる。「さて」では副詞・感動詞は主に会話文、接続詞は地の文と会話文の両方で用いられていたもので、これも異なる点である。文中に位置するのは副詞のみであるが、「さて」でも同様の傾向が見られた。

以下、品詞別に用法を見ることにしよう。

7. 1 副詞の用法

副詞の用法19例のうちに、強調の助詞「し」が付いた語形の「さてしも」が4例ある。これらは共通して「さてしもあるべき事ならねば」という句を形成している。

例27 (敦盛は)「ただとくとく頸をとれ」とぞのたまひける。熊谷、あまりにいとをしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心も消えはてて、前後不覚におぼえけれども、さてもあるべき事ならねば、なくなく頸をぞかいてンげる。

(巻九、176-6)

敦盛の最期の章段の一節である。熊谷が敦盛の首をとるのを迷っている間にも、背後に土肥・梶原の軍勢が迫り、延命はほぼ不可能な状況にある。「さても」は熊谷の心理状態を受け、それを「ならねば」と打ち消すことで「頸をかく」という行動に移る。

「さても」を除く「さても」15例のうち、14例も共通して「さてもあるべき(事)ならねば」という句を形成している。また1例は尊敬表現になっている。

例28 ^{こがう}小督殿、げにもとや思はれけん、みづから返事し給ひけり。「それにも聞かせ給ひつらん、入道相国のあまりにおそろしき事をのみ申と聞きしかば、あさましさに、内裏をばにげ出て、此程はかかるすまゐるなれば、琴なソどひく事もなかりつれども、さてもあるべきならねば、あすより大原のおくに思ひ立つ事のさぶらへば、あるじの女房の、こよひばかりの名残をおしうで、…すすむれば、さぞなむかしの名残もさすがゆかしくて、手なれし琴をひくほどに、やすうも聞き出されけりな」とて、

(巻六、336-9)

高倉天皇の寵愛を受けた小督は、清盛の迫害を恐れて宮中を出る。高倉天皇の使者、仲国に居所を探し出された小督の会話文の中、文中に位置する例である。「さても」は嵯峨で隠棲していることを受ける。

例29 ^{おなじき}同 廿五日、院の殿上にてぞ、御元服のさだめはありける。摂政殿、さてもわたらせ給べきならねば、同十二月九^{ここのかのひ}日、兼宣旨をかうぶり、十四日、太政大臣にあ^{じふしにち}がらせ給ふ。

(巻一、43-1)

高倉天皇の元服の儀式で、時の摂政、藤原基房が加冠の役をつとめることになった。加冠の役には太政大臣があたるので、摂政殿は昇任することとなる。「さても」は摂政殿が太政大臣ではない状態を受ける。

副詞の「さても」は定型句「さて(し)もあるべき(事)ならねば」で用いられている。

7. 2 接続詞の用法

接続詞の用法8例を第2章で示した分類〔接続詞、①～④〕に整理すると、①が2例、②が3例、③が0例、④が3例である。「さて」の場合は①が33例、②が3例、③が0例、④が21例であった。全体が少数ではあるが、その中で「さても」は②の話題転換の

用法が目立つ。

用法①の例

例30 それに寿永の秋のはじめ、木曾義仲とかやにおそれて、一門の人々、住なれし都をば、雲井のよそに顧て、ふる里を焼野の原とうちながめ、^{いにしへ}古は名をのみ聞きし須磨より明石の浦づたひ、さすが哀に覚て、昼は漫々たる浪路をわけて袖をぬらし、夜は洲崎の千鳥とともになきあかし、浦々島々、よしある所を見しかども、ふるさとの事は忘ず。かくてよる方なかりしは、五衰必滅の悲みとこそおぼえさぶらひしか。人間の事は、愛別離苦・^{をんぞうあくる}怨憎会苦共に我身に知られてさぶらふ。四苦・八苦、一として残る所さぶらはず。さても筑前国太宰府といふ所にて、^{これよし}維義とかやに九国のうちをも追出され、山野広といへ共、立よりやすむべき所もなし。

(灌頂、403-7)

建礼門院が後白河法皇に六道になぞらえた自己の体験を語る部分である。「さても」は体験の舞台が変わる冒頭に現れている。もう1例の「さても門司・赤間の関にて、…」(灌頂、404-7)も同様で、例30の続きの部分にある。^(注7)

用法②の例

例31 三位是をあけて見て、「かかる忘れがたみを給をき候ぬる上は、ゆめゆめ粗略を存ずまじう候。御疑あるべからず。さても唯今の御わたりこそ、情もすぐれてふかう、哀もことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」との給へば、

(巻七、49-16)

平忠度は都落ちにあたり、藤原俊成を訪ね、詠歌を集めた巻物を託す。俊成は忠度の志をおろそかにはしないと誓う。「さても」は忠度の風流さに対する賞賛へと話題を転換させる。

例32 やや久しうあって、昔いまの物語共したまひて後、「さても汝して物言ひし人は、未内裏にとやきく」。

(巻十、202-8)

捕虜となった平重衡のもとに、侍の知時がやってきた。互いに語り合った後、重衡はかつて交際していた女性の現況を尋ねる。「さても」は話題の説き起こしに用いられ、問いかけの文になっている。

例33 中將なのめならず悦ンで、聖を請じたてまって、泣々申されけるは、「今度いきながらとらはれて候けるは、二たび上人の見参に罷入るべきで候けり。さても重衡が後生、いかがし候べき。…」。

(巻十、212-8)

平重衡はやってきた聖へのあいさつが済むと、自身の来世について尋ねる。この例も「さても」は話題の説き起こしに用いられ、問いかけの文になっている。この2例は②④と分ける場合に境界にあると考えられるが、②として扱う。

用法④の例

例34 薩摩守忠教は、年来ある宮腹の女房のもとへ通はれけるが、或時おはしたりけるに、其女房のもとへ、やんごとなき女房まらうとにきたって、やや久しう物がたりし給ふ。さよもはるかにふけゆくまでに、まらうとかへり給はず。忠教軒ばにしばしやすらひて、扇をあらくつかはれければ、宮腹の女房、「野もせにすだく虫のねよ」と、ゆふにやさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇をつかひやみて帰られけり。其後又おはしたりけるに、宮腹の女房「さても一日、なにとて扇をばつかひやみしぞや」ととはれければ、(巻五、302-13)

ある日、宮腹の女房の歌を聞き、忠度は扇を使うのをやめて帰った。「さても」はそのいきさつを受け、疑問文に用いられている。

7. 3 感動詞の用法

感動詞の用法は7例で、すべて第2章で示した〔感動詞、①〕に分類できる。そのうち5例は感動の意味を表す言葉と共起する。

例35 (成親の北の方は)「今は是程の身になって、残りとどまる身とても、安穩にて何にかはせん。ただ同じ一夜^{いちや}の露とも消えん事こそ本意なれ。さても今朝をかぎり^いと知らざりけるかなしさよ」とて、(巻二、87-1)

鹿の谷の謀議が発覚し、藤原成親は清盛に捕らえられる。「さても」は夫逮捕の連絡を受けた北の方の言葉に現れる。文末は「かなしさよ」と感動の表現で結ばれている。「さて」では「さていかにやいかに」という定型句で出現したが、「さても」はいろいろな語とともに用いられる。

7. 4 「さても」のまとめ

「さても」は品詞の別から見ると、その特色が明確になる。副詞の用法が五割を超えて最も多い。「さて」では接続詞の用法が中心であったので、異なる点である。文体との関係では、副詞は地の文、接続詞・感動詞は会話文で主に用いられ、品詞による相違が見られる。「さて」では副詞・感動詞は主に会話文、接続詞は地の文と会話文の両方で用いられていたため、これも異なる点である。

副詞の「さて」は定型句「さて（し）もあるべき（事）ならねば」で用いられている。接続詞の用法は全体が少数ではあるが、その中で②の話題転換の用法が目立つ。感動詞の用法では感動の意味を表す言葉とともに用いられる。

8 おわりに

『平家物語』における「さて」とこれに助詞の付いた形の語群を調査分析した。各語の用法の特色は各章の「まとめ」で記述した。ここでは、その結果を踏まえて総合的に述べることにしよう。

「さて」とこれに助詞の付いた形の語群の中で、使用度数は「さて」が約五割と最も多く、「さても」、「さては」、「さてこそ」と続く。今回の調査で「さてまた」「さてもさても」「さておく」は見つからなかった。

地の文でよく使われる語は「さて」「さてこそ」「さても」で、主に文頭に位置している。が、「さても」には文中に位置するものもかなりある。会話文でよく使われる語は「さて」「さては」「さても」で、主に文頭に位置している。「さては」は口語的、「さてこそ」は文語的な語であるといえよう。

文中での位置から見ると、文頭が圧倒的に多くなっている。

「さて」とこれに助詞の付いた形の語群を副詞・接続詞・感動詞に分類して度数を示すと表8のようである。

この表から次のような特色が明らかになる。

- a 「さて」とこれに助詞の付いた形の語群で接続詞の用法は約七割を占める。それに対し、副詞の用法は二割強である。
- b 接続詞の中では、現代語でよく用いられる転換の用法の②は少ない。時間的・空間的・心理的な単純^(注8)継起の用法および順態接続の用法の①が最も多く、その中でも前者が中心になる。そして、問いかけ・話の先をうながす用法の④が①に続く。この④は①に近い用法である。また、語に語を接続する添加の用法の③は「さては」にのみ見られ、数も少ない。
- c 副詞の用法は「さても」に多い。それは定型句「さて（し）もあるべき（事）ならねば」で用いられるからである。

表 8

語	副詞	接続詞 (計102)				感動詞 (計12)		合計
		①	②	③	④	①	②	
さて	9	3 3	3	0	2 1	0	4	7 0
さては	1	1 8	2	2	1	1	0	2 5
さてこそ	2	1 3	0	0	0	0	0	1 5
さても	1 9	2	3	0	3	7	0	3 4
さてさて	0	0	0	0	1	0	0	1
合 計	3 1	6 6	8	2	2 6	8	4	1 4 5

以上、本研究では『平家物語』における「さて」の用法を把握し、接続詞の変遷の一面を明確に示すことができた。

〈注記〉

注1 「新大系」の底本は現在、東京大学国語研究室蔵、高野辰之氏旧蔵本である。その影印が『高野本平家物語』〈一〉～〈十二〉（市古貞次編 1973年～1974年、笠間書院）として刊行されている。

注2 「日国大」では「さてさて」を副詞と感動詞とに分類し、接続詞を設けていない。『広辞苑』も同様である。「時代別」では接続詞と感動詞とに分類している。

注3 影印を見ると、促音ッは存しない。校注者により加えられたものである。語法上、「まるらせさせ」が正しい。「新大系」の他の箇所では促音化した場合、「まるらッさせ」とある。

注4 「新大系」諸本異同解説による。

注5 「全集」のこの部分の頭注に『さては』には、『それでは』の意と、『また』の意があるが、ここは前者か。」とある。

「日国大」の見出し語「さては」では接続詞の用法を次のように説明し、この例を①に引用している。①一つの事物・事態をうけて、それ以外のものに言及するの
に用いる。その他。そのうえ。そればかりか。②相手の発言をうけて、それを条件とした判断を導く。そういうことなら。それなら。

ともに適当といえない。

注6 「新大系」ではこの用例の直前の一文、「此宮は、蟬折・小枝と聞えし漢竹の笛を、ふたつもたせ給へり。」の「蟬折」の注として次のように記している。「枝を切

り落とした節の形が生きている蟬のようであったための命名であろう。」しかし、本文に命名の由来ははっきりと書いてある。笛の背面の「蟬」という部分が折れたのである。「新大系」の注は適切でない。なお、この部分には、竹の枝を切り落とした付根の形に模した木を用いる。

注7 建礼門院の語りの続きに同様の「さて」がある。「さて武士共にとらはれて、のぼりさぶらひし時、播磨国明石浦について、…」(灌頂、405-13)

注8 井手至(1973)「接続詞とは何か」(『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』明治書院刊行)における用語である。

〈調査文献〉

近藤政美・武山隆昭・近藤三佐子(1996)『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』(自立語篇) 勉誠社刊行

梶原正昭・山下宏明校注(上-1991、下-1993)新日本古典文学大系『平家物語』上下 岩波書店刊行

〈引用文献・参考文献〉

糸井通浩(1987)「中古文学と接続語——『かくて』『さて』を中心に——」『日本語学』第6巻第9号

西田隆政(2001)「源氏物語における指示語『さて』の用法——平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって——」『国語語彙史の研究』20 和泉書院刊行

宮田京子(1993)「『かげろふ日記』の記事の連関性について——『さて』『かくて』の機能を通して——」『日記文学研究』第一集 新典社刊行

池上禎造(1947)「中古文と接続詞」『国語国文』第15巻第12号

京極興一(1973)「接続詞の変遷(一 古代から中世へ)」『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』明治書院刊行

金田一春彦(1959)「解説」日本古典文学大系『平家物語』上 岩波書店刊行

室町時代語辞典編修委員会(1994)『時代別国語大辞典 室町時代編』三 三省堂刊行

小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典 第二版』第六巻 小学館刊行

新村出(1998)『広辞苑』第五版 岩波書店刊行

市古貞次校注(一-1973, 1990、二-1975, 1995)日本古典文学全集『平家物語』一・二 小学館刊行

濱千代いづみ(1997)「平家物語における複合語『やらん』の用法」『豊田工業高等専門学校研究紀要』第30号